

## マツ枯れ・ナラ枯れ

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ 京大の知」(朝日新聞社後援)。シリーズ2「生きものの多様な世界」の3回目は、京都大学フィールド科学教育研究センターの安藤信・上賀茂試験地長が5日、「マツ枯れ・ナラ枯れ」と題して講演した。日本の森林の景観を大きく変化させた被害の実態とともに、防除や森林再生の取り組みを紹介した。



講演する安藤氏

青々としたマツ林の中に枯れて赤茶けた木が目立つ。安藤氏は講演の冒頭、マツ枯れの被害にあった京大の試験地のスライドを紹介した。マツはいつ頃に枯れ、現在は別の種類の木が植えられているという。「ここ20~30年の間に日本の森林はかなり変化した」と安藤氏が指摘する、その被害の一端だ。

マツ枯れは、マツノマダラカミキリという虫が運ぶ線虫によって広がる伝染病の一種。この線虫は元々、北米の東部にいたが、輸出された木材とともに日本に入ってきたと考えられている。日本の代表的なマツであるアカマツとクロマツはこの線虫の影響を受けやすい種類だったため、被害が広まったという。

マツ枯れ被害は九州から始まり、1979年ごろに全国的なピークを迎えた。しかし、その後も被害地域は広がり、最近では東北地方のほか、長野県など標高が高い地域にも及んでいる。

いったん被害が収まった地域でも、自然に再生したマツが成長したところで再び被害



京大の試験地で起きたマツ枯れ(安藤信氏提供)

に遭う例がみられるという。被害に遭ったマツを切って燃やしたり、薬剤をまいてカミキリを駆除したりする防除策がとられているが、防ぎ切れていないのが現状だ。

安藤氏によると、マツ枯れの影響は、木材としてのマツの生産量の減少とともに、マツ林に生えるマツタケの生産量の減少にも及んでいる。1970年代にマツ林が次々と姿を消した結果、マツタケの価格は今や1965年当時の数十倍に達する。

さらにマツが減ることで林に生える木の種類が変わり、種の多様性が失われたり、景観が変わったりする問題も起きているという。



講演する安藤氏

安藤氏は一例として、送り火で知られる京都・大文字山での取り組みを取り上げた。大文字山のアカマツ林は、ふもとの銀閣寺と一体になった景観を作り出しているほか、送り火の燃料になる木材の供給源にもなっている。しかし、アカマツが減り、代わりにシイなどが増えたため、アカマツ林を再生させるための手入れが進められるようになった。

京都・清水寺近くの東山でも、増えすぎたシイなどの常緑広葉樹を伐採し、落葉広葉樹を増やして種の多様性を回復させる取り組みが進んでいるという。

マツ枯れとともに最近問題となっているのがナラ枯れだ。ミズナラやコナラなどのブナ科の木が、マツ枯れと同じように集団で枯れる伝染病の一種で、カシノナガキクイムシ(カシナガ)という甲虫が運ぶ病原菌が引き起こすと考えられている。

安藤氏によると、ナラ枯れはマツ枯れと違って外来の伝染病ではなく、江戸時代から散発的な被害があった。しかし、衰弱した木ばかりでなく、健康な木にも病原菌を植え付けるカシナガが1980年代に登場したため、被害が拡大したという。

安藤氏はカシナガの変化に加え、人間の生活様式の変化もナラ枯れ被害の背景にある、と指摘する。里山を放置したり、公園として整備する際に林を明るくするため背の低い木だけを切ったりしたため、カシナガの繁殖に適した大きい木が残ったという。

「上の木を切って林を若返らせてやらないと、被害を増やしかねない」と警鐘を鳴らした。



講演に聞き入る参加者

講演のまとめとして、安藤氏は「単一の種類の林に病虫害が入ると全部やられてしまうが、いろいろな種類の木がある林なら被害に対応できる」と話し、森林の多様性を守ることの意義を強調した。

(※原稿及びクレジット未記載の写真は朝日新聞社提供)